

41876

教科書文庫

4
815
41-1938
20000 81684

T. 513.

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

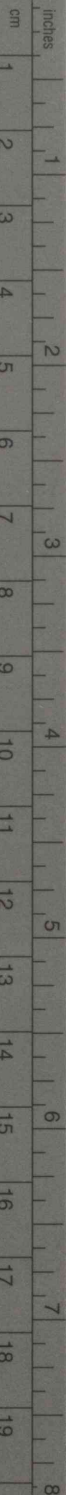


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



4a
815
昭13

中等新國文法

初級用



資 料 室

4a
8/5
昭13

昭和三十三年六月三十日檢定済

竹野長次著

中等新國文法

初級用

東京開隆堂



例言

本書は昭和十二年三月に改正された中學校高等女學校實業學校教授要目に準據し、上記中等學校の初學年用の國文法教科書として編纂したものであります。

随つて口語法の大要を説明するのが本書の目的であります。第一篇に於て國語文法文章單語についての説明をし、同時に單語を對象とする品詞の概説をし、第二篇で再び品詞について再説詳述し、第三篇で文の成分に説き及んでゐます。然し文章編については上級に於て文語法を説く時にや、詳述する方が適當と信じ、本書では文の主要成分の説明をなしたに過ぎません。

本書は品詞についての正確な概念を授け、上級に於て文語法を教へる時の基礎を作ることを主眼としましたので、動詞・形容詞・助動詞の説明には特に注意し、平易簡潔、秩序立つた組織を旨とし、生徒の理解記憶に便ならしめようと留意しました。練習の例文には特に心を用ひ、小學校教育との連絡といふ點に重きを置き、小學校上級用の教科書からその例文の約半ばを選び、また趣味の豊かな文をとつて、文法の授業に一脈の滋味を誘導しようと思ひました。それに文法は練習の繰返しによつて記憶を鮮明に正確に導き、且實際的應用の才能を養ふことが最も大切であると考へ、練習の題をなるべく多く致しました。

昭和十二年九月

著者しるす

中等新國文法

目次

第一篇 總 說	一
第一章 國語と文法	一
第二章 文と語	三
第三章 品詞概説	九
第二篇 品詞論	三三
第一章 名 詞	三三
第二章 代名詞	三五
第三章 動 詞	三〇
第四章 動詞の活用の種類	三七

第五章	形容詞とその活用	四
第六章	形容動詞	四九
第七章	用言の音便	五
第八章	副詞	六〇
第九章	助動詞の種類	六四
第十章	助動詞の接續	七
第十一章	助動詞の活用	八三
第十二章	助詞	九〇
第十三章	接續詞	九六
第十四章	感動詞	一〇〇
第三篇	文の成分	一〇五
第一章	主語 述語 補語	一〇五
第二章	修飾語	一〇九

中等新國文法 初級用

第一編 總說

第一章 國語と文法

何れの國にも、その國民の總てに通じて用ひられてゐる言語がある。言語は國々によつてそれと異なる。われわれ日本人の間に用ひられてゐる言語、即ち日本語を、我國の國語といふ。

國語

口語・文語

國語には日常の談話に用ひられる話言葉と、文章を書くときに用ひられる特別のものとの二種類がある。日常の對話に用ひるものを口語、文章を書くに用ひるものを文語といふ。

口語でも文語でも、凡そ言語には一定の法則がある。之を文法といふ。文章を讀んだり作つたりするには、これらの文法をよく知つてゐなくてはならない。

文法

練習

次の文を口語に直し、文語と口語との相違を考へよ。

- (1) 風益烈しく、波愈高し。
- (2) 今も松蟲の聲きけば、やがてその折のことども思ひ出でられて物悲し。

- (3) 秋くれて冬來り、小笹が末に霰たばしる。
- (4) 飢ゑたる者は食を擇ばず。
- (5) 菜の花水に映りて、物洗ふ女もおのづから風情を添へたり。
- (6) 秋晴の空はあくまですみて暖さ春の如し。
- (7) 汽車は風光繪の如き宍道湖畔を走る。
- (8) 手向山の紅葉夕日にはゆる様殊に見所あり。

第二章 文と語

言葉をつゞけて一つの纏つた思想を言ひ表はしたものを文といふ。例へば

入相の鐘が鳴る。
春雨がそぼ降る。

文

といふは、これだけで十分に纏つた考をいひ表はしてゐるから文である。文には

螢が飛ぶ。花が散る。鐘が鳴る。

などの如く、螢や花や鐘がどうしたかといふ動作を述べてゐるものと、

月が良い。空が澄んでゐる。風の音が淋しい。

などの如く、月や空や風の音がどんなであるか、その状態を叙してゐるものと、

彼は英國人である。あの山は富士山だ。あの星は明星です。

などの如く、「彼」「あの山」「あの星」が何であるかを解釋したり

文の三形式

説明したりしてゐるものとある。つまり、纏つた考を言ひ表はす言ひ方には、

「何がどうする」

「何がどんなだ」

「何が何だ」

といふ、三つの型がある。

主語

右の三つの型の中の「何が」に當る部分は、言ひ表はさうとする事柄の主なる題目となるものであるから、之を表はす語を主語といひ、どうする「どんなだ」「何だ」に當る部分は、それらの題目についての動作や状態を述べたり、又は「何々であ

述語

るか」を説明してゐるのであるから、之を表はす語を述語といふ。何か一つの纏つた考を言ひ表はしてゐる文には、原則として必ず主語と述語との二つの部分がある。

單語

文は一つ一つの言葉から成立つてゐる。この個々の言葉を單語又は語といふ。語は皆それ／＼の意味をもつてゐる。山河鳥美しい青いなどの語にはそれ／＼獨立した意味がある。然し語の中にはそれ自身では何の意味も表はすことが出来ないで、他の語について種々の意味を表はすに用ひられてゐるものがある。

夏の短夜が明けると、もう荷車が通り始める。

獨立語と附屬語

この文で傍線を附けたものは、獨立しては意味のない、他の語に附屬する語である。

語がそれ自身ある意味を表はし獨立して用ひられるものを、獨立語といひ、それ自身では意味がなく他の語に附屬してそれと共に用ひられるものを、附屬語といふ。

二つ以上の單語から出來てゐるものでも、必ずしも一つの纏つた思想を言ひ表はしてゐるとは言へない。言ひかへると、主語と述語との關係から成立つてゐないものがある。

赤い鳥 日の丸の旗 飛び込む蛙

などいふのは、「赤い鳥」や「日の丸の旗」や「飛び込む蛙」が、どうか、たのか、或はどんなであるのか、明かでないから、纏つた考を

連語

表はしてゐる文とはいへない。かういふ多くの語が結合されてゐるだけで、纏つた思想を表はしてゐないものを連語といふ。

練習

次の文から主語と述語とを取り出せ。

- (1) 薪を積んだ車がそろそろ行く。
- (2) 砲聲が響く。
- (3) 草叢で蟲の聲が聞える。
- (4) 彼は聲をあげて泣き出した。
- (5) 日が暮れた、戦争は止まない。
- (6) 人が何か言つてゐる。
- (7) 子供達は躍りあがつて喜んだ。
- (8) 日が麗らかに照つてゐた。

品詞

名詞

代名詞

第三章 品詞概説

文法上の性質や用法によつて、單語を左の九種類に分ける。かく分類された一つ一つを品詞といふ。

- 名詞 代名詞 動詞 形容詞 副詞 助動詞 助詞
- 接續詞 感動詞

名詞とは、鶯・櫻・緑・東京・家康などの如く、事物・土地・人物の名を表はす語をいふ。

代名詞とは、僕君・彼・此處・そこ・こちら・あちらなどの如く、事

動詞

物の名の代用に用ひる語をいふ。
動詞とは「風が出て海が鳴つてゐる」「山がある」などいふ文の、「出る」「鳴る」「ある」「ある」の如く、事物の動作・存在を表はす語をいふ。

形容詞

形容詞とは「つめたい風」「烈しい戦」「長い鐵橋」などいふ「つめたい」「烈しい」「長い」の如く、事物の性質・有様を表はす語をいふ。

副詞

副詞とは「鮮かに照らしてゐる」「非常に寒い冬の日」などいふ場合の「鮮かに」「非常に」の如く、動詞・形容詞の意味を限定する語をいふ。

助動詞

助動詞とは「叫び聲が聞えた」「叫喚よびいて居るらしい」「た

助詞

しい」の如く、動詞に附いてその意味を助けてゐる語をいふ。
助詞とは「山吹がこぼれて春の水が淺黄に流れる」の文で「が」「て」「の」「に」の如く、他語について、その語と下に來る語との關係を示し、又は之に或る意味を添へる語をいふ。

接續詞

接續詞とは「空には雲が濃い、しかし雨は降るまい。」「私は川邊に立つた。そして水底に映るわが影を見守つたの」し「かし」「そして」の如く、語と語と、文と文とをつゞける語をいふ。

感動詞

感動詞とは「あゝ見事だ」「いゝえ知りません」「あゝ」「いゝえ」の如く、感動の情を表はしたり、又は應答の場合に用ひたりする語をいふ。

練習

次の文の各々の單語の品詞をいへ。

- (1) 加茂河原に夜がふけて千鳥の聲を聞く心持も古い京都の特有のものである。
- (2) 一定の時刻が來ると度はづれな汽笛のうめき聲が耳の鼓膜を振動する。
- (3) この三四日晴天つゞきで病人には幸福である。日が出てから日が入るまで縁をめぐつて日光が射し込むから随分温暖である。温暖は僕にとつて何よりの藥餌だ。
- (4) 近郊には林を見受けない。
- (5) おや終列車が出てしまつた。こりやまあどうしたらよからう。
- (6) しらゆくと朝霧が野山をこめて、月のやうな日輪がほのかに浮ぶ。
- (7) 野路を行く人影がたゞちに消えて、けたましいもすの音が聞える。

第二篇 品詞論

第一章 名詞

名詞

名詞とは、人名・地名又は事物の名を表はす語をいふ。

- 菅原道眞 源義經 東郷平八郎 坪内雄藏
- 京都 淡路島 鎌倉
- 金剛石 時計 梅 心 夢 春 秋
- 戦争 競技 運動 忍耐 進級

これらは皆名詞である。名詞には普通名詞と固有名詞とがある。普通名詞とは、例へば櫻・時計などの如く、同じ種

普通名詞

固有名詞

數詞

類のものに共通に用ひられるものをいひ、**固有名詞**とは、京都義經の如く、そのものにだけ用ひられる個々の名をいふ。然し國語では文法上名詞を分類する必要がない。

數量を表はす語、**順序**を表はす語も、やはり名詞である。之を特に**數詞**といふ。

一つ 十 百 千 五人 十錢 八匹 半ダース
などは數量を表はし、

第一 八號 百番 十人目
などは順序を表はしてゐる。

文の主語には名詞の用ひられる場合が多い。名詞には活用がない。

練習

次の文から名詞・數詞をぬき出せ。

- (1) 三坪ばかりの里芋畑が路傍にあつた。
- (2) 十八九の娘が何か口の中で僕に挨拶して行き過ぎた。
- (3) あとを見ると嵐山も、もう暮れてゐる。船宿の後の暗い松林の中で、二人の男が差し向ひで焚火をしてゐる。
- (4) 一寸の蟲にも五分の魂。
- (5) 重盛は平家にとつて實にその柱石であつた。
- (6) 十月小春の日の光がのどかに照り、小氣味よい風がそよ／＼と吹く。
- (7) 興福寺の伽藍は半ば廢れたが尙三重の塔が、猿澤の池水に影をうつして南都第一の美觀である。
- (8) 月のさえた冬の夜友人と二人町へ散歩に出た。
- (9) 七百年の興亡は夢となつて、英雄の墓にはこけがむしてゐる。

第二章 代名詞

代名詞

代名詞とは事物の名の代りに用ひる語をいふ。即ち事物の名をいふ代りに直ちにその事物を指していふ語である。

體言

代名詞も文の主語となる場合が多い。そして名詞と同じく活用がない。名詞及び代名詞を體言といふ。

人代名詞

代名詞には人を指していふ時に用ひる人代名詞と、事物・場所・方向を指す時に用ひる指示代名詞とがある。

指示代名詞

人代名詞指示代名詞の主なものは次の通りである。

人代名詞

指示代名詞

自分	僕	わたし	わたくし	自稱
君	おまへ	あなた	あなた	對稱
彼	あのかた	そのかた	このかた	他稱
	だれ	どなた	どのかた	不定稱

	事物	場所	方向	
近稱	この これ	こゝ	こつち こちら	
中稱	その それ	そこ	そつち そちら	
遠稱	あの あれ	あそこ	あつち あちら	
不定稱	どの どれ	どこ	どつち どちら	

この・その・あの・どのなどは、もと、こ・そ・あ・どといふ代名詞に、のといふ語のついたものであるが、現今では一語として取扱ふ。

(近稱はすぐ近くの事物場所方向を指すに用ひ、中稱はやゝ離れてゐるそれらをさすに、遠稱は遠方のそれらを指すに用ひる)
 (人代名詞指示代名詞の不定稱は指す人物事物場所方向の明かでない場合又は疑はしい場合に用ひる)

練習一

次の文から人代名詞をとり出せ。

(1) 若し君何かの必要で道を尋ねたく思へば、畑の真中に居る農夫にきゝ給へ。

(2) 私は今日はまだどなたにもお目にかゝつてゐません。

(3) あなたがたはとんでもない人たちだ。

(4) 生れつき臆病な自分をわれながらいやになつた。

(5) 足音が聞える、だれか來たやうだ。

(6) お前たちのうちで誰が一番此の父を大事に思つてくれるか。

(7) 彼等が町人といつて賤しめられたのも其の爲であらう。
 (8) 物を言はないのはわしばかりだ。

練習二

次の文から指示代名詞をとり出し、何を指してゐるか、又、近稱か中稱か遠稱か不定稱かをいへ。

(1) 海も單調、陸も單調、これがこの地の特色とでも言はうか。

(2) 何處かで物音が聞えて來る。

(3) 生れて以來その時ほど吃驚したことはなかつた。

(4) どちらを向いても知らぬ人ばかり、それでもあちらこちらと名所舊跡を尋ねて昔を想ひ、どこの人とも見知らぬ人と語り合ふなど旅の面白味は格別である。

(5) あの人に告げてやちなさい、こゝは禁獵區ですと。

(6) ふもとの川を白帆が二つ三つ通つて行く。あれは港の親船へ蜜柑を

動詞

運んで行くのであらう。小春日和の暖さにとけて、其處からも夢のやうに船歌が聞えて来る。

(7) どの山を見てもどの谷を見ても、蜜柑の木でない處はない。

(8) あちらでもこちらでもさえたは、さみの音がちよきんくと聞える。

(第三章 動詞)

動詞とは人や事物の動作存在を表はす語をいふ。

今日もひねもす寂しく砂に臥して想ひに耽る、海は暮れ、黄ろい月見草はひらめきそめた、さあ網をたゝんで、灯の家に歸らう。見えるは、折々、幻のやうに、沖邊に浮び、また消える、蒼白い帆かげだけである。

右の傍線を附けてある語は皆動詞である。動詞は用言

用言

の一種である。

動詞はその用ひ方によつて、語形が變化する。この語形の變化を動詞の活用といふ。例へば「行く」といふ語について見ると、

今日は遊びに行かない。

早く学校に行きたい。

明日は学校に行く。

ピクニックに行く人。

海に行けば鷗の飛ぶのが見える。

急いで行け。(よ)

入

動詞の活用

動詞の活用形

語尾

語幹

の如く、行か・行き・行く・行けと變化する。この變化した各の形を動詞の活用形といふ。語形の變化する部分は語の末の部分だけである。この變化する部分を語尾、變化しない部分を語幹といふ。「行く」の「い」は語幹、「く」は語尾である。

動詞の活用は五十音圖の同行の間に行はれ、決して他の行にはわたらない。例へば「讀む」といふ動詞の語尾「む」はマ行の音であるから、この語の活用はマ行の間で行はれる。

練習一

次の動詞を語幹と語尾とに分けよ。

- 飲む 降りる 通ふ 話す 泣く 笑ふ 眺める 歸る 動く

練習二

次の文から動詞をとり出し何行の活用かをいへ。

- (1) 蜜柑採歌がすみきつた晩秋の空気をふるはして、何處からともなくのどかに聞えて来る。
- (2) 山畑には蜜柑の木が行儀よく並ぶ。
- (3) そんな弱いことではだめだと、自ら勵まして進む。
- (4) 月島の横を通り越す頃には、もうつかれきつて氣も遠くなるばかりだ。
- (5) つかれも何も忘れてしまつて、僕も思はず萬歳を叫ぶ。

活用形の種類

未然形

動詞の活用形は左の六種に分ける。

未然形 連用形 終止形 連體形 假定形 命令形

・未然形は、打消の意味を表はす助動詞ない又は、未來の意味を表はす「よう」「う」などに連なる形で、動作や存在がまだ成立つてゐない意味を表はすに用ひられる形である。

連用形

行かない 行かう 伸びない 伸びよう
登らない 登らう 流れない 流れよう

連用形は、他の用言に連ねる時に用ひられる形である。

行き兼ねる 登りきる
立ち騒ぐ 読み耽る

連用形はまた

「登りは困難だ」「行きは舟でした」

の如く名詞としても用ひられ、

山に登り、河を渉る。

野に行き、花をつむ。

終止形

本を讀み、字を書く。

の如く、文を言ひ切らずに中途で止めて、下に來る文につづける時にも用ひられる。

終止形は文を言ひ切る時、即ち普通に文を結ぶ時に用ひられる形である。

野を行く 山に登る

草木が伸びる 水が流れる

連體形

連體形は體言に連ねる時に用ひられる形である。

道を行く人 山に登る時

競技に勝つ喜び 本を讀む楽しみ

假定形

假定形は、助詞の「ば」に連なり、假定の意味を表はす時に用ひられる形である。

郊外に行けば静かだ。

丘に登れば海が見える。

本を讀めば興味が湧いて来る。

命令形

命令形は命令の意を表はす時に用ひられる形である。

この形には助詞の「よ」「ろ」「い」を添へて用ひることが多い。

山に登れ 学校に行け

本を閉ぢよ 早く起きろ 急いで来い。

練習

次の文の傍線を付けてある語の活用形を考へよ。

(1) 水際へ未おりようとすると、近く人の聲が聞用えて、じやぶつといふ音が水終に起る。

(2) 風が顔甲を撫甲てた。

(3) 私達は海の水にも鳴り響甲くやうな聲を揃甲へて歌を唄甲ひ出した。

(4) 海の上は漣未さへ起未たない。

(5) 空には眞夏の日終が終ざら終／＼と終か終じ終やく。

(6) 砂の上を歩くと足の裏が焼けるやうだ。

(7) いつか夕方の色が四方にたゞよ甲ひ、向ふの山も薄墨色に暮甲れて行終く。

(8) 列車はちやうどおもちゃのやうに見える。

第四章 動詞の活用の種類

動詞の活用はその語尾の屬する五十音圖の行の同じ行

類動詞の活用の種

の中で行はれるものであるが、動詞によつては五十音圖中の四段にわたつて變化するものもあれば、或は三段に、或は一段だけに變化するものもある。斯く變化の形式が語によつて異なつてゐる。いま活用の形式によつて、その種類を左の五つに分ける。

四段活用 上一段活用 下一段活用 力行變格活用

サ行變格活用

四段活用 「行く」といふ動詞は、

遠足に行かない (未然形)

山に行きたい (連用形)

野原に行く (終止形)

四段活用

旅に行く人 (連體形)

川邊に行けば涼しい (假定形)

早く學校に行け (命令形)

の如く五十音圖のア段・イ段・ウ段・エ段の四段にわたつて、カ・キ・ク・ケ・と活用する。これを四段活用といふ。

(四段活用の動詞は五十音圖中のカ・ガ・サ・タ・ナ・ハ・バ・マ・ラの九行にある。)

四段活用表

行	カ	ガ	サ
語幹	行	騒	消
語尾	か	が	さ
未然	か	が	さ
連用	き	ぎ	し
終止	く	ぐ	す
連體	く	ぐ	す
假定	け	げ	せ
命令	け	げ	せ

ラ	マ	バ	ハ	ナ	タ
取 ^と	踏 ^ふ	叫 ^よ	願 ^{ねが}	死 ^し	打 ^う
ら	ま	ば	は	な	た
り	み	び	ひ	に	ち
る	む	ぶ	ふ	ぬ	つ
る	む	ぶ	ふ	ぬ	つ
れ	め	べ	へ	ね	て
れ	め	べ	へ	ね	て

練習

- 次の文から四段活用の動詞をとり出し、その活用を示せ。
- (1) 現今の加茂川は清淺を通り越して汚ない裏へた川になつてゐる。
 - (2) 砂利を取るために所きらはす穴を掘る、水聲が亂れる、足場をつくる、埃

上一段活用

上一段活用 「見る」といふ動詞は、

- 花を見ない (未然形)
- 花を見たい (連用形)
- 花を見る (終止形)
- 花を見る人 (連體形)
- 花を見れば悲しみを忘れる (假定形)

花を見よ(ろ)

(命令形)

の如く、み・み・みる・みる・みれ・み・となつて、五十音圖中のイ段の一段の音と、それに、る・れの附いたものである。これを上一段活用といふ。

(上一段活用の動詞はカ・ガ・ザ・タ・ダ・ナ・ハ・バ・マ・ヤ・ラ・ワの十二行にある)

上一段活用表

ダ	タ	ザ	ガ	カ	行
耻 <small>は</small>	落 <small>お</small>	案 <small>あん</small>	過 <small>す</small>	(着 <small>き</small>)	語幹 / 語尾
ぢ	ち	じ	ぎ	きな	未然
ぢ	ち	じ	ぎ	きよす	連用
ぢる	ちる	じる	ぎる	きる	終止
ぢる	ちる	じる	ぎる	きる人	連體
ぢれ	ちれ	じれ	ぎれ	きれ <small>ば</small>	假定
ぢよ <small>(ろ)</small>	ちよ <small>(ろ)</small>	じよ <small>(ろ)</small>	ぎよ <small>(ろ)</small>	きよ <small>(ろ)</small>	命令

下一段活用表

ワ	ラ	ヤ	マ	バ	ハ	ナ
率 <small>ひき</small>	下 <small>お</small>	老 <small>お</small>	試 <small>こ</small>	亡 <small>ぼろ</small>	強 <small>し</small>	(羨 <small>に</small>)
ゐ	り	い	み	び	ひ	に
ゐ	り	い	み	び	ひ	に
ゐる	りる	いる	みる	びる	ひる	にる
ゐる	りる	いる	みる	びる	ひる	にる
ゐれ	りれ	いれ	みれ	びれ	ひれ	にれ
ゐよ <small>(ろ)</small>	りよ <small>(ろ)</small>	いよ <small>(ろ)</small>	みよ <small>(ろ)</small>	びよ <small>(ろ)</small>	ひよ <small>(ろ)</small>	によ <small>(ろ)</small>

(ヤ行上一段の動詞は、普通射る・鑄る・老いる・悔いる・報いるの五語である)
(ワ行上一段の動詞は、居る・率ひきある・用もちあるの三語である。但し「用ある」は「用ひる」の如くハ行にも活用する)

練習

次の文から上一段活用の動詞をとり出して、その活用を示せ。
(1) 桐の葉の落おちるのを見みてゐると淋しみしい氣持になる。

- (2) 彼は耻ぢる心もなく綻びた着物を平氣で着て歩く。
- (3) 國に報いる心は國民が誰も持ち合せてゐる。
- (4) 自分を顧みて過去の過ちを悔い改めることが大切である。
- (5) 朽ちた材木は建築に用ゐられない。
- (6) 朝は早く起き夜は早く寝る。
- (7) 彼の頭の中にあるものは、唯夕日を浴びた柿の色であつた。
- (8) しばらく火の色を見てゐたが、やがて「よし」と叫び、火を止めた。

下一段活用

下一段活用 「越える」といふ動詞は、

山を越えない (未然形)

山を越えたい (連用形)

山を越える (終止形)

山を越える人 (連體形)

山を越えれば平野になる(假定形)

早く山を越えよ(命令形)

の如く、越え・越え・越える・越える・越えれ・越えれ・越え・となつて、五十音圖のエ段の音と、それに、る・れ・の附いたものである。これを下一段活用といふ。

(下一段活用の動詞は五十音圖の各行と、ガ・ザ・ダ・バの行にある)

下一段活用表

行	語幹	語尾	未然	連用	終止	連體	假定	命令
ア	(得)	え	え	え	え	え	えれ	えよ
カ	授	け	け	け	け	け	けれ	けよ
ガ	告	げ	げ	げ	げる	げる	げれ	げよ
サ	寄	せ	せ	せ	せる	せる	せれ	せよ

(下一段活用の動詞では、ア行ハ行マ行ワ行に属するものが紛れ易い)
 (ア行下一段活用の動詞は、得るの一語だけであり、ワ行下一段活用の動詞は、飢ゑる、据ゑる、植ゑるの三語だけである)

ワ	ラ	ヤ	マ	バ	ハ	ナ	ダ	タ	ザ
飢 ^う	別 ^{わか}	絶 ^た	止 ^と	浮 ^{うか}	考 ^{かんが}	重 ^{かさ}	撫 ^な	育 ^{そだ}	交 ^ま
ゑ	れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	せ
ゑ	れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	せ
ゑる	れる	える	める	べる	へる	ねる	でる	てる	せる
ゑる	れる	える	める	べる	へる	ねる	でる	てる	せる
ゑれ	れれ	えれ	めれ	べれ	へれ	ねれ	でれ	てれ	せれ
ゑ(よ・ろ)	れ(よ・ろ)	え(よ・ろ)	め(よ・ろ)	べ(よ・ろ)	へ(よ・ろ)	ね(よ・ろ)	で(よ・ろ)	て(よ・ろ)	せ(よ・ろ)

(ヤ行下一段活用に属する普通の動詞は、癒える・消える・覚える・肥える・絶える・煮える・越える・凍える・聞える・おびえる・冴える・榮える・燃える・吠える・冷える・聳える・生える・殖える・見えるなどの語である)

映(る) 閃(る) 甘(る)

練習

次の文から下一段活用の動詞をとり出し、その活用を示せ。

- (1) 寝る間も寝ずに幼児を育てる母親の心は母性愛に溢れてゐる。
- (2) 眠りから覺めると朝の爽かな風が頬を撫でる。
- (3) 晴れた日の午後、自分たちは友達を集めて、野球の練習を始めた。
- (4) 岩陰の水の流れおちるあたりを求めて、そこで疲れた身體を休めた。
- (5) 尋ねて行く友もなければ訪れて来る人もない。
- (6) 兄はそこらに散らばつてゐる木の根や小枝などを拾ひ集めて来てたき火を始めた。
- (7) たまに散る落葉の音が、かさり／＼と聞える。

カ行變格活用

(8) 夜が更けるにつれて燈がだん／＼暗くなり今にも消えさうになつた。

カ行變格活用 「來る」といふ動詞は、

誰も尋ねて來ない (未然形)

海に來たいと思つてゐた (連用形)

夏は人々が海に來る (終止形)

海に來る人が多い (連體形)

海邊に來れば達者になる (假定形)

早く海に來い(よ) (命令形)

の如く、五十音圖のイ段・ウ段・オ段の三段に活用し、ウ段に、
れが附いてゐる特殊のものであり、且カ行だけにあつて、他
の行にはないから、これをカ行變格活用といふ。この活用

に屬する動詞は來るの一語だけである。

カ行變格活用表

	未然	連用	終止	連體	假定	命令
(來)	こ	き	くる	くる	くれ	こ(よ・い)

(「來る」を「來る」と讀む時は、文語となり、四段活用の動詞となる)

サ行變格活用

サ行變格活用 「爲る」といふ動詞は、

勉強を爲ない(爲ぬ) (未然形)

勉強を爲たい (連用形)

勉強を爲る (終止形)

勉強を爲る人 (連體形)

勉強を爲ればよいが (假定形)

勉強を爲ろ(爲よ)

(命令形)

の如く、五十音圖中のイ段・ウ段・エ段の三段に活用し、ウ段に、
る・れが附いた特殊のものであり、サ行だけで他の行にはな
いから、これをサ行變格活用といふ。この活用に屬する動
詞は爲る(爲)の一語だけである。

サ行變格活用表

(爲)	未然	連用	終止	連體	假定	命令
せし						
	し					
	する	する				
		すれ				
	せ <small>(よ)</small>	し <small>(ろ)</small>				

(名詞や漢語が「爲る」と熟して出來た、罰する、運動する、命ずる、任ずる、論ずる、
などいふ語はサ行變格に活用する。然しまた、重んじる、信じるなどのや
うに上一段に活用するものもある。)

(未然形と命令形とは共に、し・せの二つに分れるが、これは「しない」「しろ」「せぬ」

「せよ」となり、「ない」「ろ」につゞく時は「し」となり、「ぬ」「よ」につゞく時は「せ」と
なるのである)

練習

次の文から動詞をとり出し、その活用の種類を區別せよ。

- (1) 萱原(かや)の方へおりにて行くと、今まで見えた廣い景色が悉く隠れて終(しま)ひ、小
さな谷の底に出るだらう。
- (2) 水は清く澄み、大空を横切る白雲の斷片を鮮かに映してゐる。水(みづ)の滯(とど)
には枯蘆(あし)が少しばかり生えてゐる。
- (3) 頭の上の梢で小鳥が鳴く。さうしたら、君の幸福である。すぐ引きか
へして左の路を進み給へ。忽ち林が盡きて、君の前に見わたしの廣い
野が開ける。
- (4) 武藏野に散歩する人は、道に迷ふことを苦にしてはならない。
- (5) はてしもなく續く廣野の中で人々は自由な大氣を呼吸しながら土の

活用の種類の見
分け方

香に親しみ、樂しげに働く。

(6) 畠などでも小路によつて細かく仕切ることをしていないから、一枚の畠でうねが五町も十町も長々と續いてゐるのが少くない。

(7) こんな廣い畠であるから耕すにしても、うねを作るにも、種をまくにも、大てい機械と馬の力による。

(8) 障子をあけて見るといまだに雨が降りつゞく。「これでは明日の山廻りはだめだ」と思ひながら、机によりかゝり向ふの方を眺める。

口語の動詞の活用は以上の五種類であるが、その中で、カ行變格活用とサ行變格活用とは、來る爲るの二語だけであるから、活用の種類を見わけける必要のあるのは**四段活用上** **一段活用下** **一段活用**の三種である。動詞に打消の「ない」といふ語をつけて、意味の通じる動詞の語尾がア段の音例へ

ば、**行かない**、**登らない**、**走らない**の如くである時は、その動詞は、**四段活用**であるし、イ段の音例へば、**起きない**、**率ゐない**、**顧みない**、**伸びない**の如くである時は、その動詞は、**上** **一段活用**であるし、エ段の音例へば、**流れない**、**絶えない**、**始めない**、**饑ゑない**の如くである時は、その動詞は、**下** **一段活用**である。

動詞の中には一つ動詞で用ひ方によつて活用の異なるものがある。例へば「育つ」といふ動詞は「子供が育つ」といふやうに用ひられる時は、**四段活用**であるし、「子供を育てる」といふやうに用ひられる時は、**下** **一段活用**である。

動詞の自他と活
用の相違

第五章 形容詞とその活用

形容詞

形容詞

事物の性質・状態をいひ表はす語をいふ。

さびしい 悲しい 夕暮は、譬へ難い 一種の影の力を以つて迫つて來た。

碧い 細い 炊煙は糸のやうに立ちあがる。

廣い 野原で牛が鳴く。

けたまほしい 泣聲が耳を劈く。

長い 間見なれた 懐しい 山の姿に最後の別れを告げた。

右の傍線を附けたものは皆形容詞である。形容詞は用言の一種である。

用言

形容詞の活用

形容詞は用ひかたによつてその語形を變化する。「淋し

い」といふ語は、

夕暮は誰も淋しく思ふ (連用形)

夕暮は淋しい (終止形)

淋しい夕暮 (連體形)

淋しければ遊びに來い (假定形)

形容詞の活用形

の如く、く、い、けれと變化する。かうした語形の變化を形容

詞の活用といふ。そして變化した形を形容詞の活用形と

いふ。この變化しない部分を語幹、變化する部分を語尾と

いふ。「淋し」は語幹、く、い、けれは語尾である。

語幹
語尾

活用形の種類

形容詞の活用形を左の四種に分ける。

連用形 終止形 連體形 假定形

連用形

連用形 「面白く思ふ」「美しく見える」の如く、他の用言に連なる時に用ひられる形である。

連用形はまた、

夕暮は淋しく、朝は嬉しい

の如く、文をいひ切らずに下に來る文につゞける時にも用ひられる。

終止形

終止形 「登山は面白い」「花は美しい」の如く文を言ひ切

る時、即ち普通に文を結ぶ時に用ひられる形である。

連體形

連體形 「面白い遊戯」「美しい花」の如く、體言に連なる時に用ひられる形である。

假定形

假定形 「面白ければ見に行かう」「美しければ可愛い」の如く、性質や状態について、假定的にいひ表はす時に用ひられる形である。

形容詞活用表

	語幹	語尾	
寒 ^{さむ}	く	い	連用
淋 ^{さび}	し	けれ	終止
			連體
			假定

(口語の形容詞には未然形と命令形とがない)

シク活用
ク活用

〔口語では、形容詞の活用は、**くいけれ**と活用する一種だけである。「淋しい」の如く、語幹の末に「し」のあるのを**シク活用**といひ、「寒い」の如く「しのない」を**ク活用**といつて、二種に分ける事もあるが、「美しい」「淋しい」は「美しい」「淋しま」で語幹であるから結局活用は、**くいけれ**の一種である〕

練習

次の文から形容詞をとり出して、その活用を示せ。

- (1) 白い砂地の渚には清らかな水が小い波を寄せて、磯臭い風が冷たく襟首を吹いた。
- (2) 廣い青海原が遠く展げて眞白い波頭が白馬の鬣の如く飛沫を揚げて凄まじく押寄せてゐる。
- (3) 夕焼が赤く空を染めだした。黄いろくからびた刈株を渡つて烈しく吹きつける野分のために、落ち葉があわたしく舞ひあがる。
- (4) あゝ、おいたはしいお姿。とても明るいうちに山本まではお着きになりますまい。

形容動詞

第六章 形容動詞

- (5) だん／＼寒くなつて来たが、**あいに**薪も盡きてしまった。
- (6) このまゝに日を送つては、**唯空しく**うゑ死する外はございません。
- (7) 秋晴の**美しい**空は格別である。
- (8) 寒いと暖かいがほとんど規則正しく交替する。

形容動詞 事物の性質状態を述べる語でありながら、普通の形容詞とはちがつて、動詞のやうに活用するものを形容動詞といふ。形容動詞は動詞の一種として取扱ふ。

口語の形容動詞には、形容詞の連用形に動詞のあるがつ

昨日は暖かつた
スキーは寒しかろう
さわやかな朝が来た
彼の怒りは冷ました

第一種
暖か かつた かつた
第二種
暖か だつた だつた
形容動詞活用表

いた、美しくある「淋しくある」「寒くある」が約つて「美しかる」「淋しかる」「寒かる」となつたもの(これを第一種の形容動詞といふ)と、靜かに「爽やかに」「丁寧に」「親切に」などいふ副詞に動詞のあらが約つた「靜かある」「爽かある」「丁寧ある」「親切ある」が約つて「靜かなる」「爽かなる」「丁寧なる」「親切なる」となつたもの(これを第二種の形容動詞といふ)との二種類ある。そして前者と後者とは活用が異なる。今その口語の活用を表に示すと、次のやうになる。

第一種	語尾	
寒	幹	
淋し		
		未然
から(う)		連用
		終止
		連體
		假定
		命令

第二種	親切	
爽やか		
だ(らう)		
		だつ(た)
		だ
		な
		なら(ば)

(第一種に屬するものは口語では未然形と連用形だけで、未然形は「う」に連なつて「寒からう」「淋しからう」の如くなり、連用形は「た」に連なつて「寒かつた」「淋しかつた」となる)

(第二種に屬するものは未然形は「う」に連なつて「爽かだらう」「親切だらう」の如くなり、連用形は「た」に連なつて「爽かだつた」「親切だつた」となる。連體形は「爽やかな朝」「親切な人」といふやうに體言につらなり、假定形は「爽かならよい」「親切なら嬉しい」の如く、そのまゝでも假定の意味を表はし、又「爽かならば」「親切ならば」の如く「ば」に連ねても用ひられる)

第二種の形容動詞は「爽かに」「親切に」の「に」を捨て、「爽か」「親切」から直に「です」に連なり「爽かです」「親切です」といふやうに

第二種形容動詞の特別な場合

も用ひられる。その場合の活用は次のやうになる。

親切	爽か	語幹	語尾
でせ(う)	でし(た)	未然	連用
です		終止	

練習

次の文から形容動詞をとり出し、その種類、活用をいへ。

- (1) 彼の腹の中は正直だつた。
- (2) をり／＼ 生暖かな日影が射す。
- (3) 細かな落葉は俄に日に映じて金色を放つ。
- (4) 九月になると賑かだつた海邊も淋しからうし、静かな山の生活もそろそろ寒からう。
- (5) 舟はのどかな櫓の音を響かせて、水の上を滑つて行く、麗かな朝日の影

を照り返してある海の面は鈍く輝く、爽かな風が顔を撫でる、その時は實に樂しかつた。

- (6) 彼はなんと親切な人だらう、普通のものならばこゝまで案内してはくれないのに、その心持が誠に嬉しかつた。
- (7) あゝ、このむざんな光景を御らんない。
- (8) その言ひ方が如何にもをかしかつたので、言つた者も聞いた者も思はずにつこりした。
- (9) 今日は殊に波も静かだ。
- (10) 私は今更ながらドイツ人の勤勉なのに驚きました。

第七章 用言の音便

用言が他の語につゞく場合に、用語の語尾が發音の都合

動詞の音便の種類

で、他の音に轉じることがある。これを音便といふ。動詞の音便は、或る動詞が「て」「た」に連なる場合に起るもので、動詞の語尾が「イ」に轉じるもの、「ウ」に轉じるもの、「ン」と撥ねるもの、促音になるものの四種ある。

イ音便

イ音便 力行、ガ行の四段活用の動詞は、「て」「た」につづく時、

「き」が「い」に轉じて、

窓を開いて 音を聞いた

舟を漕いで 天を仰いだ

などとなる。そしてガ行の「ぎ」が「い」となる時は、「て」「た」が濁つて「で」「だ」となる。

ウ音便

ウ音便

ウ音便 ハ行四段活用の動詞は、「て」「た」につづく時、連用形

の「ひ」が「う」に轉じて、

手を洗うて 本を買うた

などとなる。

(ウ音便をハ行の活用と混じて、「洗ふて」「買ふた」などとしてはいけない)

撥音便

撥音便 ナ行、バ行、マ行四段活用の動詞は、「て」「た」につづく

時、連用形の「に」「び」「み」が撥音の「ん」となつて、

死んで 死んだ

遊んで 飛んだ

沈んで 休んだ

撥音表
ニハミ
ム
ム
ム
ム

ウ
ー
3
ウ

イ音便
きぎ
ぎ
ぎ
ぎ

イセキ
促音便

動詞の音便
注意しなけ
ればかなつた
ある。

促音便

などとなる。この場合「た」は濁音の「で」「だ」となる。

(撥音便をマ行の活用と混じて「沈むで」「沈むだ」としてはいけない)

促音便 夕行ハ行ヲ行四段活用の動詞は「て」「た」につづく

時、連用形の「ち」「ひ」「り」が促音つに轉じて、

戦に勝つて 弓を放つた

塵を拂つて 友を救つた

道を走つて 河を渡つた

などとなる。

(ハ行四段活用の連用形「ひ」はウ音便とも促音便ともなる)

(カ行四段活用の動詞「行き」は促音便になり、「行きて」「を行つて」ともいふ)

形容詞の音便

ウ音便
美しく [3]
km-ll
形容詞

形容詞の連用形「く」は「う」に轉じる、これを形容詞のウ音便

といふ。例へば

「美しく」が「美しう」

「楽しく」が「樂しう」

などとなる。然し形容詞の連用形の「く」がウ音便となるのは、普通は形容詞の下に「ございます」「存じます」といふ語の來る場合に限られてゐる。

練習一

次の文から音便をぬき出し、かつ何行の活用であるかを示せ。

(1) 彼は心も勇んで出掛けた。

(2) 走つて行く車の音飛んでゆく群集のわめき聲、急に騒しくなつた街の響を、彼は夢心地で聞いたのであつた。

- (3) 狂氣じみた彼は笑つたかと思ふと忽ち怒鳴り出した、怒鳴つたかと思ふと、今度は立つて躍つた。
- (4) 彼は和らいだ顔に笑をたへへて、名もない花にやさしい眼を注いでゐる。
- (5) 沖の方には、白帆が浮んでゐる、岸邊には漕いでゆく船の音がゆるやかに聞える。
- (6) 久しく單調平凡な景色にあいてゐた私には如何にも心地ようございます。
- (7) 二人は戶外にたゝすんでしばらく耳をすましてゐたが、やがてピアノの音がはたと止んだ。
- (8) 一度でもよいから演奏會へ行つて聽いてみたい。
- (9) はいつてみよう。さうして一曲ひいてやらう。
- (10) 若い男が靴を縫つてゐる。そのそばにある舊式のピアノによりかゝつてゐるのは妹であらう。二人は不意の來客にさも驚いたらしい様

子。

練習二

次の文に誤があつたら正せ。

- (1) 今更言ふても甲斐がない。
- (2) あつちこつちの稚木は赤くも黄いろくも色づゐて、日の光をあびてキラ／＼と輝いた。
- (3) 木の葉は高く大空に舞ふて小鳥の群かの如く遠く飛び去る。
- (4) 林が一時に裸體になつて蒼々むだ冬の空がその上に垂れてゐる。
- (5) 切株に腰をかけて書を読むでゐると、林の奥で物の落ちたやうな音がした。
- (6) 頭上の木の葉風なきに落ちて微かな音をし、それも止むだ時、自然の静肅が身に迫る。
- (7) 自分は屢々日記に、野分のすさまじさを書ひた。
- (8) 先日は結構な品を頂戴致しまして有りがとふございました。

- (9) お耻し^まござ^いますが、粗末なものを差上げます。
- (10) 道のほとりに女郎花^{ななはな}など咲^ひひてゐることもあらう、並木の梢に小鳥が鳴^いゐるかも知れない。

第八章 副詞

副詞

水が静かに流れる。

彼は徐ろに歩み寄つた。

彼は空をつくくと眺めた。

右の文で傍線を付けてある語は、それ／＼「流れる」「歩み寄る」「眺める」といふ動作を限定してゐる。かく動詞や形容詞の意味を修飾限定してゐる語を副詞といふ。

形容詞
名詞
動詞
形容詞
副詞

雨戸を繰ると夜風がさつと吹き込んて灯がさうり／＼なゆりた。

風がすこし穩かになつた

彼は大層のつそりと歩いてゐる

もつとゆつくり話して行きたまへ

右の文で傍線を付けてある語は、それ／＼「穩かに」「のつそり」と「ゆつくり」などいふ語の意味がどの程度のものかを限定してゐる。然もこれらの限定されてゐる語はみな副詞である。かく副詞は他の副詞の上にあつてそれらの意味を限定する。

彼は暫く紺碧の空を眺めてゐた。

落葉が頻りに窓の障子を打つてゐる。
向ふにちら／＼と灯の光が見える。

右の文で傍線を付けてある語は、眺めて「打つて」「見える」などいふ動詞の意味を限定してゐる。斯く副詞は他の語を隔て、下にある用言の意味を限定することがある。副詞は必ず限定される語の上にあるとはきまらない。

(副詞には活用がない。また主語となることもない)

(副詞には、大層もつと甚だなどの如く、本来のものゝ外に、他の品詞から轉成したものが多い)

(副詞には語の終りに「に」「と」のついたものが多い。例へば、親切に 立派に 悠々と あつさりと のつそりと)

練習

形容詞の連用形(副詞)

次の文から副詞をとり出し、その限定してゐる語を示せ

- (1) ちら／＼と見えはじめた町の灯が、空氣のせむか、特殊な光澤に輝く。
- (2) 京都の夕暮に趣をそへるものは鐘の音である。圓く内に巻き込んで、無限に細く長く空氣の間を舞ひゆく、その鐘の音が、一面の夕闇の中か
ら、あちらに一筋、こちらに一筋と渦き上つて来る。
- (3) ぱつと打ち開いた畑からは、一面に黄色な陽炎が燃え立つ。その向ふに嵐山が靜かに浮び出でゐる。
- (4) 山はいつもしつとりと霽つたやうな味を持つてゐる。
- (5) 餘りに漫々とした川だと物凄くなるが、大堰川は手頃な麗はしい川だ。
- (6) 折から燈がぱつと明るくなつたかと思ふと、ゆら／＼と動いて消えてしまつた。
- (7) 友人がそつと立つて窓の戸をあけた。
- (8) いろ／＼の物音いろ／＼の物の形が、ごた／＼と耳にはいり、目にはいるばかりで、何が何やらさつぱりわからなかつた。

動詞
形容詞
形容動詞
助詞
助動詞

第九章 助動詞の種類

助動詞は他の語に附屬して用ひられ、單獨では用ひられない。即ち主に動詞に附いてその叙述を助けるが、また體言について叙述する意味を添へ、或は他の助動詞にもついて、それらの意味を助ける。

今日は雨も降るまい
蒔かぬ種は生えない

右の例で、まいないは何れも動詞の叙述を助けてゐる、あの山は富士山です
正成は忠臣だ

助動詞

れる
られる

助動詞の種類

右の例です。だはそれら體言について叙述する意味を添へてゐる。

犬を走らせよう。

木は折れませんでした。

右の例で、ようんではそれら助動詞についてその意味を助けてゐる。

助動詞はその表はす意味の上から左の十種に分ける。

受身 可能 自發 使役 敬讓 打消 時

推量 希望 指定

受身の助動詞 れる られる

受身の助動詞

お金がない 形容詞 見分けるには 下にあるといふのを つけ、意味が成立つたならば、これは形容詞

行かない 助動詞

可能の助動詞

風に吹かれる
人々に迎へられる
右の如く、或る動作を仕向けられる、意を表はすものを受身の助動詞といひ、れる られる の二語がある。

可能の助動詞 れる られる

この位の山は登られる
困難に堪へられる

右の如く、或る動作を爲し得る、意を表はすものを可能の助動詞といひ、れる られる の二語がある。

自發の助動詞

自發の助動詞 れる られる

故郷に歸る日が待たれる

老いた親の身が案じられる

右の如く、動作が自然に起る、意を表はすものを、自發の助動詞といひ、れる られる の二語がある。

使役の助動詞

使役の助動詞 せる させる

生徒に文章を作らせる

小鳥に水を浴びさせる

右の如く、動作を他のものにさせる、意を表はすものを、使役の助動詞といひ、せる させる の二語がある。

敬讓の助動詞

敬讓の助動詞 れる られます

打消の助動詞

父はいろ／＼の事を話される
 あの方は道を尋ねられる
 私は朝早く起きます
 右の如く、他人の動作を尊敬したり、自分の動作を丁寧
 いふ意を表はすものを敬讓の助動詞といひ、れる られ
 る ます の三語がある。

(右の外に、なざる 左の様に 遊ばす 助動詞の敬讓に なる 申す 致す つかまつる など
 の語も敬讓の助動詞のやうに用ひられる)
 (「れる」「られる」の二語は、受身可能自發敬讓の意に用ひられる)

打消の助動詞 ない ぬ(ん)

雨が降らない

風が吹かぬ(ん)

右の文で「ない」「ぬ」は「降る」「吹く」といふ目前の動作をそのま
 ま打消してゐる。かく動作を打消す意を表はすものを打
 消の助動詞といひ、ない ぬの二語がある。

(「ぬ」は時によつて「風が吹かぬ」の如く「ん」と發音する)

時の助動詞

時の助動詞 た(だ) う よう

今空には月がのぼつた

私は明日東京に行かう

僕はこれから勉強をしよう

右の文で「た」「は」「のぼる」といふ動作が既に起つた意を表は

し「う」ようは「行く」勉強をするといふ動作が未来に起る意を表はしてゐる。かく動作が過去に起つた意を表はすものを過去の助動詞といひ、未来に起らうとする意を表はすものを、**未来の助動詞**といふ。過去の助動詞は、た の一語、**未来の助動詞**は、う よう の二語である。

〔た〕はガ・ナ・バ・マ行四段活用の動詞につく時は、音便で「道を急いだ」彼は山で死んだ「友達と遊んだ」花を摘んだなどいふやうに濁音となる。

推量の助動詞

推量の助動詞 らしい う よう まい

今日は夕立があるらしい(終止) 今朝は早く起きよう(接尾語) 今頃はもう櫻が咲きだすだらう(終止) 右の文で「らしい」「う」「よう」は夕立がある「咲きだす」「早く起きる」といふ事柄を推量する意を表はしてゐる。「まい」は「晴れる」といふ動作の存在しないことを推量する意を表はしてゐる。かく物事を推量する意を表はすものを**推量の助動詞**といひ、らしいうようまいの四語がある。「う」「よう」は推量の助動詞であるが、未来に使ふ場合は時の助動詞として用ひられる。

明日は空も晴れまい(推量) 終止

比況

其のものを他のものと比べて推量してゐる

右の文で「らしい」「う」「よう」は夕立がある「咲きだす」「早く起きる」といふ事柄を推量する意を表はしてゐる。「まい」は「晴れる」といふ動作の存在しないことを推量する意を表はしてゐる。かく物事を推量する意を表はすものを**推量の助動詞**といひ、らしいうようまいの四語がある。「う」「よう」は推量の助動詞であるが、未来に使ふ場合は時の助動詞として用ひられる。

(右の外、「やうだ」「さうだ」の二語も推量の助動詞のやうに用ひられる。「月が昇るやうだ」「暴風が来さうだ」)

(「まい」は打消の助動詞の中に入れる學者もある)

希望の助動詞

希望の助動詞 たい たがる

僕は水が飲みたい

弟は本を讀みたがる

右の文で「たい」「たがる」は「飲む」「讀む」といふ動作を欲するの意を表はす。斯く希望の意を表はすものを希望の助動詞といひ、たい たがる の二語がある。但し「たがる」は他人のうへの事についていひ、自分のうへには用ひない。

指定の助動詞

指定の助動詞 だ です

これは私の寫真だ

富士は美しい姿の山です。

右の文で「だ」「です」は、寫真である「美しい姿の山である」と指し定めてゐる。斯く事物を何々であると指し定める意を表はすものを指定の助動詞といひ、だ です の二語がある。

練習

次の文から助動詞をとり出し、その種類を示せ。

(1) 日が暮れても嵐は止まない。妻まじい勢ひで一晩中私の小さな家をゆすぶつた。^時

(2) 山を下る時には水筒が空になつてゐた。よくも飲んだものだと思ふ。^時

(3) 梢に百舌鳥が鳴いてゐるのを見ますと、彼は口をあんぐり開けて、じつと眺めてゐるのです。^指

(4) 彼は東京から關西まで、舟で歸らうか、それとも汽車にしようかと迷つ

- た。時
- (5) 若い人の心を曇らせる醜い事柄が、社会には多い私にはさう思はれる。
使
- (6) 故郷の空が懐しく思ひ出される。そして年老いた親の身の上が案じられる。
自
- (7) 犬に吠えられても、彼は平氣である。よくもさうしてゐられるものだ。
使
- (8) 老人は爐邊で子供たちに昔の戦争の話などをして聞かせた。そして今時の人は昔の人ほど剛膽ではあるまいなどと自慢した。
使時
- (9) 今日雨も降らぬらしい。出来るなら天氣で居らせたいものだ。
指
- (10) 私はあの暴風雨の夜を思ひ出しては、ぞつとせずにはゐられなかつた。
指
- (11) 父上、私はどう申上げてよいかわかりません。なに、どう申上げてよいかわからぬ、それでは返事にならぬではないか。
使打
- (12) 國王は釋迦に修行を思ひ止らせようとして、自分の國をゆづらうとま

- で申し出た。
時
- (13) 近來はめつきり元氣が衰へて、もう政務にもたへられなくなつて來た。
指
- (14) これはどなたであらうな。笑つて下さるな。どうも娘のやうに思はれてならぬが。
指

第十章 助動詞の接續

助動詞の接續

助動詞は名詞・動詞・他の助動詞などについて、その言ひあらはし方を助ける語であるが、助動詞がそれらの語に接續するには一定の法則がある。

體言につくもの

(一) 體言につくもの。だ ですよ らしい
指定の助動詞「だ」です及び推量の助動詞「らしい」は

彼は臆病者だ

あれは山です

これは國産品らしい

の如く體言につらなる。然しまた

この本は僕のだ

この品はいゝのです

この品は内地のらしい

の如く、僕の「いゝ」の「内地」などにもつらなる。この場合

は「僕の「いゝ」の「内地」といふ語句を體言と同様の資格のも

のと見る。次にまた

明日は雨が降るだらう

動詞助動詞の未然形につくもの

彼は東京に行くでせう

雨が降るなら止めよう

の如く「だ」ですの未然形に「う」のついた「だらう」「でせう」と假

定形の「なら」は動詞形容詞の連體形にもつく。猶「らしい」は、

雨が降るらしい

の如く、動詞の終止形にもつらなる。

(二) 動詞助動詞の未然形につくもの。れる られる せる

させる ないぬ うよう

受身(自發可能敬讓)の助動詞「れる」「られる」「使役の助動詞「せる」

「させる」「打消の助動詞「ない」「ぬ」「未來(推量)の助動詞「う」「よう」は、

人に聞かれる
犬に吠えられる
馬を走らせる

彼に水を止めさせる

雨が降らない

風が吹かぬ

遊びに行かう

今日は晴れよう

の如く動詞助動詞の未然形に連る。但し「れる」「せる」「う」は四段活用の未然形に「られる」「させる」「よう」は四段活用以外の動詞の未然形に連るのが原則である。但し「よう」はサ行變格

活用では未然形の「し」の方に附いて「何々をしよう」となり「せ」には附かない。

① 可能の意を表はす場合に四段活用の動詞では「登られる」「泳がれる」といふべきであるが、普通「登れる」「泳げる」などと簡約していふことが多い。

② 「られる」がサ行變格活用の動詞につらなる場合は「攻撃せられる」「出發せられる」となるべきであるが、簡約して「攻撃される」「出發される」といふやうに、「何々される」となることが多い。

③ 「させる」がサ行變格活用の動詞につらなる場合は「勉強せさせる」となるべきであるが、普通「勉強させる」といふやうに「何々させる」といふ。

④ 打消の「ないぬ」は各活用の動詞の未然形につらなるが、サ行變格活用の動詞には「ない」と「ぬ」とが別れて、「ない」は「し」に、「ぬ」は「せ」に別々に連る。例へば「勉強をしない」「勉強をせぬ」のやうになる。

⑤ 「ないぬ」は四段活用の「有る」といふ語にはつらならない。

せぬ
しない

動詞助動詞の連用形につくもの

(三) 動詞助動詞の連用形につくもの た たい たがる
ます

過去の助動詞「た」希望の助動詞「たい」「たがる」敬讓の助動詞「ます」は

弟は九時に家を出掛けた

私は水が飲みたい

太郎は遊びに行きたがる

妹は學校に行きます

の如く、動詞助動詞の連用形につらなる。

(四) 動詞助動詞の終止形につくもの らしい

動詞助動詞の終止形につくもの

推量の助動詞「らしい」は「何々であるやうだ」の意で、體言につらなるのであるが、また

遠くに海が見えるらしい

の如く、動詞助動詞の終止形にもつらなる。

(五) 特殊のもの まい

夢にも思ふまい

話は盡きまい

右の文で「思ふ」は四段活用の終止形、「盡き」はカ行上一段活用の未然形である。かく「まい」は四段活用の動詞の終止形、それ以外の動詞の未然形につらなる。他の助動詞につく

場合もこれに準ずる。

〔まい〕がサ行變格につく場合は、その未然形の「し」の方について「彼は仕事を
しまい」競争しまい」などとなり、普通には「すまい」とは言はない

練習一

次の文から助動詞をとり出し、その動詞助動詞への接續をいへ。

- (1) 人が来ようが来まいが、そんな事には頓着しない。
サ行變格、未然形、特殊なサ行變格、未然形、サ行の未然形
- (2) 雨が止んだから、野に行かうと思ふ。
サ行變格、未然形、サ行の未然形
- (3) 知らぬことは知らんと云ふがよい。
サ行變格、未然形、サ行の未然形
- (4) 人に認められることはなかくむづかしい。
サ行變格、未然形、サ行の未然形
- (5) 犬に河を渡らせる。
サ行變格、未然形、サ行の未然形
- (6) 雨に降られて困つた。
サ行變格、未然形、サ行の未然形
- (7) 川に出て水を浴びさせる。
サ行變格、未然形、サ行の未然形
- (8) 雲間に微かに見えるのは山だ。富士の嶺らしい。うらゝかに晴れた。
サ行變格、未然形、サ行の未然形、動詞の終止形、体言にづく、助動詞の活用形

姿が見たい。

- (9) 水ばかり飲みたがつてゐる。
サ行變格、未然形、サ行の未然形
- (10) 日本人ですと彼は元氣よく答へました。
サ行變格、未然形、サ行の未然形

練習二

次の文に誤があつたら正せ。

- (1) 何人もその勇ましさで感心せない者はあるまい。
サ行變格、未然形、サ行の未然形
- (2) 彼はさぞ喜んでゐる。
サ行變格、未然形、サ行の未然形
- (3) そんなことがあるふとは知らなかつた。
サ行變格、未然形、サ行の未然形
- (4) 外には變つた事はないやうだ。
サ行變格、未然形、サ行の未然形
- (5) 君の話のしやうがわるい。
サ行變格、未然形、サ行の未然形

第十一章 助動詞の活用

助動詞には活用がある。いまその活用のしかたによつ

助動詞の活用と
その種類

動詞の如き活用

て、左の四種に分ける。

- (一) 動詞と同じ形式の活用をするもの。
- (二) 形容詞と同じ形式の活用をするもの。
- (三) 特殊な活用の形式をもつてゐるもの。
- (四) 活用の形式をもつてゐない、即ち語形の變らないもの。

動詞と同じ形式の活用をするもの。

使役	種類		受身 (可能自 發敬讓)	種類	
	語	活用		語	活用
使役	させる	せる	られる	れる	未然
	させ	せ	られ	れ	連用
	させる	せる	られる	れる	終止
	させる	せる	られる	れる	連體
	させれ	せれ	られれ	れれ	假定
	させ(よろ)	せ(よろ)	られ(よろ)	れ(よろ)	命令

希望	たがる	たがら	たがり	たがる	たがる	たがれ
----	-----	-----	-----	-----	-----	-----

「れる」「られる」「せる」「させる」は動詞の下一段活用と同じ活用の形式であり、「たがる」は四段活用と同じ形式である。但し「たがる」には命令形がない。
 (可能自發敬讓の「れる」「られる」は受身の「れる」「られる」と活用は同じであるが、命令形がない)

形容詞と同じ形式の活用をするもの。

種類	種類		種類	種類	
	語	活用		語	活用
形容詞	打消	ない	なく	ない	未然
	推量	らしい	らしく	らしい	連用
	希望	たい	たく	たい	終止
	希望	たい	たく	たい	連體
	希望	たい	たく	たい	假定
	希望	たい	たく	たい	命令

「なく」は「ある」と合して「なからう」「なかつた」などいふやうにも用ひられる。

形容詞の如き活用

「君は知らなからう」雨が降らなかつた」
 「らしい」には假定形はない。「らしく」が「ある」と合して「らしかつた」のやうにも用ひられる。「何も知らないらしかつた」彼は遊びに行くらしかつた」
 「たくは、ある」と合して「たからう」「たかつた」などいふやうにも用ひられる。「君も行ったからう」「僕は山に登りたかつた」
 「らしく」「たく」は音便で「らしう」「たう」となる。「雨が降るらしう。ございます」「明日は天氣らしう。存じます」「山に行きたう。ございます」「勉強を致したう。存じます」

特殊の活用形式

特殊の活用形式をもつもの

種類	活用		未然	連用	終止	連體	假定	命令
	語	活						
打消	ぬ			ず	ぬ(ん)	ぬ(ん)	ね	
過去	た		たら(う)		た	た	たら(ば)	

敬讓	指定		敬讓
	だ	です	
ます	だ	です	ます
ませ	だら(う)	でせ(う)	ませ
まし	だ(つた)	でし(た)	まし
ます(る)	だ	です	ます(る)
ます(る)	(な)		ます(る)
ますれ	なら(ば)		ますれ
ませ			ませ

「た」の假定形「たら」は「ば」を伴はずにそのままでも假定の意に用ひられる。「明日雨だつたら止さう」
 「ます」の命令形「ませ」「まし」は、敬讓の意を含む「下さい」「なさい」「遊ばす」などいふ語だけについて、敬讓の意を含まぬ動詞にはつかない。
 「ます」の終止形連體形は「る」をつけて「まする」といふやうにも用ひられる。
 「だ」はその連用形に「て」といふ形をもつてゐる。「昨日も雨で。今日も雨だ」「空は日本晴でよい天氣だ」
 「だ」は文語の「なり」に當るものであるから、連體形に「な」、假定形に「なら」といふ形をとるのである。「なら」はそのままでも假定の意に用ひられる。「明日

よい天気なら出掛けよう)
 「である」を指定の助動詞とする説もあるが、本書は「だ」の連用形「て」に「ある」が
 合したものととして取扱ふ)

語形の變らぬもの

語形の變らないもの

種類	語		未然	連用	終止	連體	假定	命令
	推量	未來						
	まい	よう						
	まい	よう						
	(まい)	(よう)						

(これらの三語は本來終止形だけであるが、まゝ連體形にも用ひられる)

練習

次の文から助動詞をとり出してその活用を示せ。

(1) 僕はびつくりせずにはゐられなかつた。

(2) 木蔭に休んで風に吹かれると涼しくなる。

(3) 僕は山に行きたくないのでもないが、それよりも海の方が面白からうと思ふ。

(4) 子供に野球を見させようと思つて連れて來ました。

(5) 彼は危く浪にさらはれるところであつたが、友達に助けられて沈まないですんだ。

(6) 何事も思ふ通りに行くまいそれが人生の常である。

(7) あれは富士山だ。僕はいまにあの山に登らんのが残念だ。來年の夏は登らうと思つてゐる。

(8) この雨で川は水が増したらしい。

(9) これが私の家ですと、彼は私に教へました。

(10) 彼はもう東京に歸つたらうと思ふ。

(11) 二人の少年はまだ知らないらしい。老砲手は「逃げろ〜」と叫んでゐるが、二人の耳にははいらぬ。

助詞

- (12) 二人はふかの來るのに氣がついた。驚いて一しやうけんめい逃げようとしてあせつてゐる。
- (13) 後を追つて御いになつたら、大てい追ひつけませう。
- (14) 何か御注意下さることはございますまいか。
- (15) 水の色はものすごい程濃い紺色だ。

第十二章 助詞

助詞は語の下について、語と語とがどういふ關係にあるかを示し、また語の下について、その語にある意味をいひ添へるに用ひられる語である。

助詞は他の語に附屬する語で、單獨では意味がない。また活用もない。

體言につくもの

助詞を次の三種に分ける。

第一種 體言について語句の關係を表はすもの

- が 雪が降る 水が飲み度い
- の 鳥の聲 僕の聞いた話
- を 空を飛ぶ 本を讀む
- に 家に居る 花見に行く 待ちに待った
- と 立派な人となる 君と遊ぶ 山と水とを寫す
- へ 東へ行く 家へ歸る
- より 雪より白い肌 弟は君より歸りが遅い
- から 東京から京都へ向かふ 昨日から始めた

用言につくもの

で ペンで書く 汽車で行く

(これらの語は體言につくのであるが、また體言以外の、體言に準じて取扱はれる語句にもつく)

第二種 用言について接續を表はすもの

ば 讀めば面白い 降れば止めよう

と 風が吹くと埃が立つ 道が遠いと困る

ても 郊外に出てもかまはない 早くてもよい

けれど(も) 風はないけれど(も)寒い 品はい、けれど

(も)高價だ

が 年は若いが學問がある つらいが我慢する

のに 雨が降るのに傘もささない 忠告したのに聞

かない

からので 雨が降るから(ので)中止した 風が吹くか

ら(ので)困った

し 雨も降るし風も吹く 身體も丈夫だし頭もい

い

て 見て来る 行つて来る

ながら 泣きながら歸った 話しながら行く

たり 寝たり起きたりしてゐる 勝つたり負けたり

する

右の助詞の中、ばは用言の假定形に、てもては用言の連用形に、ながらは動詞の連用形、形容詞の終止形に、たりは、用言

の連用形に、のては用言の連體形に付き、他の助詞は用言の終止形につらなる。そしてててもたりは音便で濁ることがある。

飛んで来る 本を讀んでゐる

踏んでもよい 死んでも甲斐がある

飛んだりはねたりする 遊んだり學んだりする

〔たり〕は過去の助動詞「た」の連用形であると説く學者もある。

諸語につくもの

第三種 諸語についていろくの意味を添へるもの

は 花は美しい 鳥は舞ひ魚は躍る

も 花も笑ひ鳥も歌ふ 風も吹き雨も降る

さへ 勉強さへすればよい 僅かのいとまさへない

でも お茶でも飲まう 本でも讀まう

しか 君にしか話さない もう今年も十日しかない

ばかり 水ばかり飲んでゐる 一時間ばかり待った

だけ 君にだけ知らせよう 一日だけ待つて呉れ

まで 今日まで待つてゐた 大人まで喜んでゐる

など 君などは立派な學生だ 手紙なども來ない

なり 行くなり歸るなりいづれかにしよう

やら 嬉しいやら悲しいやらわかりやしない

こそ 僕こそ失禮しました 今日こそ出掛けよう

ぞ 今日暑いぞ 随分つらいぞ

ね 御丈夫です。ね 今日(けふ)は天氣(あま)らしいね
 よ 僕は止(と)めにするよ 君(きみ)も何か話(わ)しなさいよ
 か 何處(どこ)かへ行(い)かう 花見(はなみ)に行(い)かうか
 ぐらゐる すこしぐらゐる寒(ひや)くてもかまはない これぐ
 らゐるのことはこらへよ
 な 誰(だれ)にも知(し)らせるな さう急(いそ)ぐな
 の 雨(あめ)の降(ふ)るのよりも風(かぜ)の吹(ふ)くのは厭(いや)だ

練習

次の文から助詞をとり出し、その種類をいへ。

(1) 私は外へ出たけれど少しも嬉しくなかつた。大切な用事を引き受けて来た身の上であるといふ事を考へると、外に遊んでゐる子供の群にも注意せずに、一心になつて道を歩いた。けれども時々風の音などが

耳に入つた。

(2) 親譲りの無鐵砲で子供の時から損ばかりしてゐる。小學校にゐる時分學校の二階から飛び降りて一週間ほど腰を抜かした事がある。なせそんな無茶をしたと聞く人があるかも知れぬ。別段深い理由でもない。新築の二階から首を出してゐたら、同級生の一人が、冗談に、いくら威張つても、そこから飛び降りる事は出来まい、弱蟲や、いとはやしたからである。

(3) 村の男たちは大きな聲で、面白可笑しい話をしながら行つた。各自の家から出て来た女たちは、男の群れに後れたり追ひついたりして、長く續いた列の所々に、色のある着物の集團をつくつてゐた。

(4) 中學を出ると、専門の學校に行くなり、實務に就くなり、自分の方針をきめなくてはならない。然るに彼はそんなことには無頓着で、何が何やら無我夢中で遊んでゐる。

(5) 無心の子供が遊んでゐるのを見てゐると、大人の私までがその中に釣

り込まれて嬉しくなる。

第十三章 接續詞

接續詞

接續詞 語句と語句とを結びつけたり、又は前文の意味をうけて、それを下の文につづける爲に用ひられる語を接續詞といふ。

山また山を越えて進む。

富士山が汽車の右に見え或は左に現はれる。

右の文で「また」或は「の二語は「山」と「山」右に見えと左に現はれる」の二つの語句をつないでゐる。また、

彼は不衛生な男だ。だから健康を害した。

雨が降り出した。すると人々は皆傘をさし始めた。

右の文で「だから」との二語は、上の文をうけて、下の文がその當然の結果であることを示してゐる。また

空には雲が濃い。しかし雨は降るまい。

今日は祭日だ。けれども用事があつて遊びに行けない。

右の文で「しかし」けれどもの二語は、上の文をうけて、それに順應しない事柄をいふ場合に用ひられてゐる。

(接續詞には活用がない。また主語にも述語にも修飾語にもならない) 練習

次の文から接續詞をとり出せ。

- (1) 私は随分勉強をした。然し試験の結果は思はしくなかつた。
- (2) 僕は失敗した。だが決して落膽はしない。
- (3) 山は空気が澄んでゐる。だから勉強には一番適してゐる。
- (4) 今まで待つたが彼は來ない。けれども來ないことはあるまい。
- (5) 風が吹き出した。すると砂塵が濛々と立ち上つた。

第十四章 感動詞

感動詞

感動詞 感動の情を表はす語、呼びかける語、または應答に用ひる語をいふ。

あら美しい
まあ可愛い
おう危ない

右の「あら」「まあ」「おう」は、美しいもの、可愛いものを見たり、危ない時にさしかゝつて、發した語である。

おい歸らう
もしく、田川さんですか
どれ出掛けよう
右の「おい」「もしく」「どれ」はいづれも、呼びかける場合に用ひる語である。

はい承知しました
いゝえ恐しくも怖くもありません

へえさうですか
 右の「はい」「いゝえ」「へえ」は、人と應答する場合に用ひる語である。

感動詞は文からは切りはなして獨立して用ゐられる。
 また文の冒頭に來ることが多い。

(感動詞には活用がない。また主語述語修飾語として用ひられない)

練習

次の文から感動詞をとり出せ。

- (1) あらまあお珍しいこと。
- (2) さあ出掛けませう。はい。
- (3) おや雷が聞え出した。
- (4) おい君そこは水が深いですよ。
- (5) え、私などはどうなつてもいいのです。

活用語と
 無活用語

以上、品詞の九種類について述べたのであるが、更に品詞を活用のあるものと、ないものとの二種に大まかに分ける。即ち

名詞 代名詞 副詞 接續詞 感動詞 助詞
 の六種には活用がない。
 動詞 形容詞 助動詞

の三種には活用がある。猶、名詞・代名詞は體言といひ、動詞・形容詞は用言といふ。助動詞・助詞は獨立しては用ひられない、他語に附屬して用ひられる語であり、接續詞・感動詞は

體言
 用言

主語・述語・修飾語にはならない。

練習

次の文を各の單語に分け、それらの單語の品詞と、活用のある語ならばその活用を示せ。

- (1) 空風が吹いて通る。跡からカラ／＼に乾いた往來の中央を、砂煙が濛々と力のない渦を巻いて、振れてひよろ／＼と行く。
- (2) 日が落ちる。野は風が強く吹く。林は鳴る。武藏野は暮れようとする。寒さが身に沁みる。
- (3) 涼しい風が、川面から、舟の上、掛屋根の下を吹き抜いて呉れる。舷によりかゝつて、手を浸すと、水がしゆうと音を立て、水晶の花のやうに散つて行く。
- (4) あゝ、五海里の海上を僕も泳ぎきることが出来たのだ。
- (5) それは、惜いことをした。どうかして御目にかゝりたいものだが。

第三篇 文の成分

第一章 主語 述語 補語

既に第一篇第二章に述べておいた通り、文にはその文の題目となるものをあらはすものと、題目について叙述してあるものとある。

水が流れる

日章旗が翻る

の文で、「水」や「日章旗」は「流れる」「翻る」といふ動作の題目を示し、「流れる」「翻る」は「水」や「日章旗」の動作について叙述してある。

この題目となる事物をいひ表はす語を主語といひ、題目に

主語述語

ついでその動作存在を叙述してゐる語を述語といふ。この主語と述語とは文章には原則として是非共なくてはならぬものである。

補語

然し主語と述語とだけでは完全な意味をいひ表はすことの出来ない場合がある。

彼は打つた 牧童が跨つてゐる
とだけでは、彼は何を打つたのか、牧童が何に跨つてゐるのか不明である。随つて「打つた」「跨つてゐる」だけでは、叙述の役目を完く果してはゐない。この場合、
彼は犬を打つた 牧童が牛に跨つてゐる

といふやうに言はなくては完全でない。かく述語の性質によつては、「犬を」「牛に」などいふ語が必要になる。この述語の叙述の意味を補足する爲めの語を補語といふ。

彼は弟に土産物を買つた

彼は妹に本を教へた

右の文で、「弟に」「土産物を」「買った」といふ述語のはたらきを補足してゐるし、「妹に」「本を」「教へた」といふ述語のはたらきを補つてゐるから、共に補語である。

(詳しくいへば「弟」と「土産物」「妹」と「本」は、それら述語に對する關係が多少ちがつてゐる。「土産物」「本」は述語のはたらきの目的を表はし、「弟」「妹」は述語のはたらきの係る標的を示してゐる。随つて前者を客語、後者を補語とい

つて區別してゐる學者もあるが、こゝでは客語も補語も共に述語のはたらきを補足してゐるのであるから、兩者とも補語といふことにしておく。

練習

次の文を主語・述語・補語の各成分に分けよ

- (1) 有明月が空に懸つてゐる。
- (2) 蟋蟀こはらむが鳴いてゐる。
- (3) 農夫が草を車に積んでゐる。
- (4) 風が窓のガラス戸をふるはせる。
- (5) 螢が水邊に飛んでゐる。
- (6) 雲が山の頂にかゝつてゐる。
- (7) 王は満面に笑みをたゞへた。
- (8) 月が闇の世界を照らす。
- (9) 彼は空を眺めてゐた。
- (10) 清い月光は彼の顔を照した。

第二章 修飾語

月が淋しく荒野を照らしてゐる。

春雨がしとくと降つてゐる。

右の文で「淋しく」「しとくと」は共に主語でも述語でも補語でもない。「淋しく」は「照らしてゐる」といふ動作を「し」として「と」は「降つてゐる」といふ動作を、共に修飾してゐる。又、

白い文鳥が小さい首を傾けた

夕焼の雲が西の空にたなびいてゐる

闇の道が續いてゐる

右の文で「白い」「小さい」「夕焼の」「西の」「闇の」はそれごとく「文鳥」

「首」「雲」「空」「道」を修飾してゐる。斯く、主語・述語・補語を修飾してゐる語を修飾語といふ。

文は主語・述語及び補語だけでは最も簡単な思想しか言ひ表はせない。少し複雑な思想になると、どうしても修飾語が必要になる。

風が吹いて通る

といふよりは、

冷い風が淋しく吹いて通る

といふ方が複雑であり、

冷い風が道行く人を淋しく吹いて通る

といふ方が一層詳しく複雑である。

(主語と補語には主として體言が用ひられ、述語には用言又は體言に助動詞・助詞の附いたものが用ひられるのが普通である)

修飾語は修飾される語のすぐ上にあることもあり、また修飾語と被修飾語との間に他の語が置かれてゐる場合もある。

普通には文は主語・補語・述語の順で組み立てられてゐるが、時には、

空に月が出た

の如く補語が頭に來ることもあり、

修飾語の位置

主語・補語・述語の位置

出た空に月が
の如く述語が頭に來ることもある。

練習

次の文から修飾語をとり出し、修飾されてゐる語を示せ。

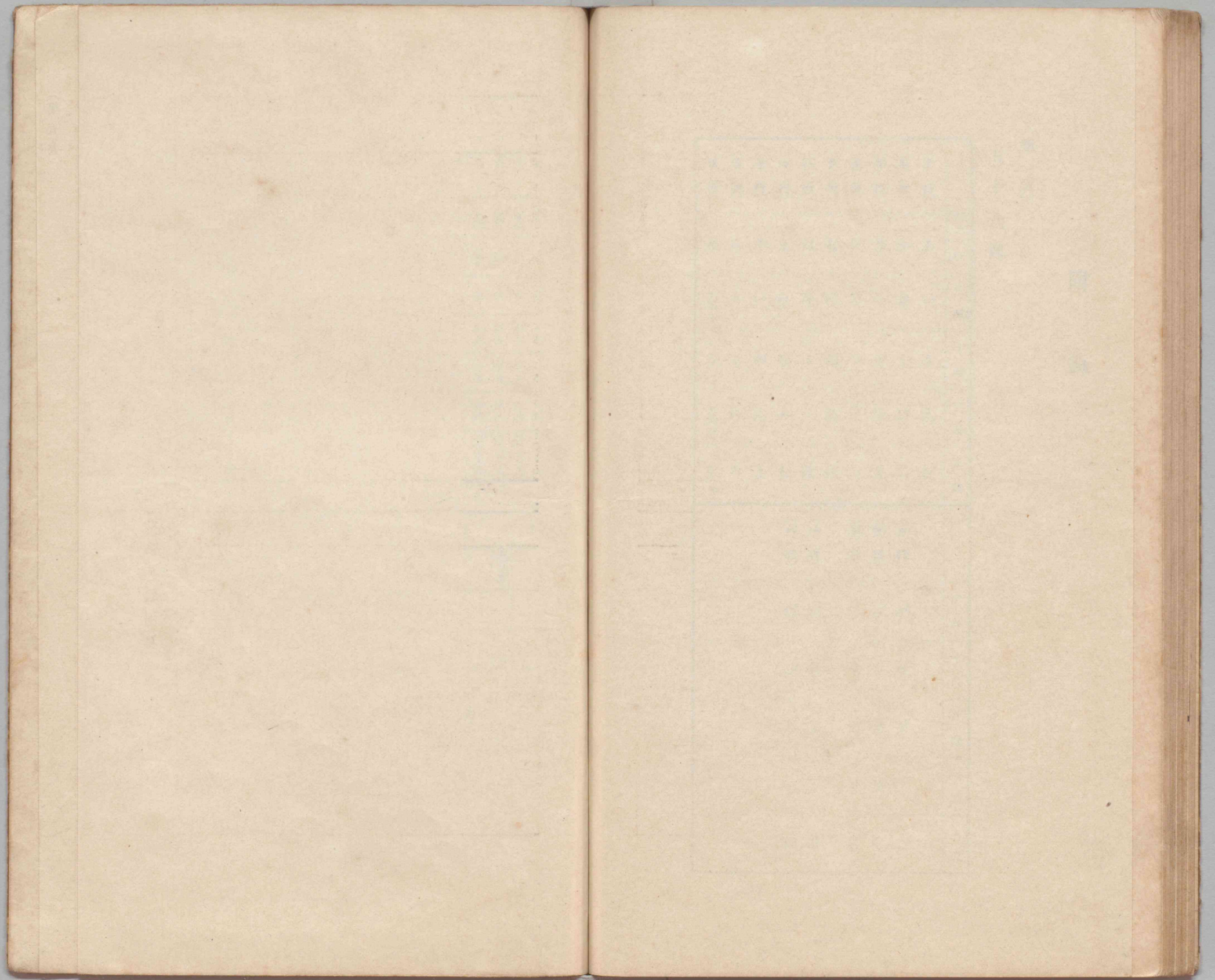
- (1) 磯邊の松は烈しい風に揺られてゐる。
- (2) 白い雲が紺碧の空に綿のやうに浮んでゐる。
- (3) 夕日が土藏の壁を赤々と染めてゐる。
- (4) 舟は穏かな波の上を静かに滑つていつた。
- (5) 槌の音がかん／＼と、長閑に静かな朝の空氣に響いてゐた。
- (6) 二人はしばらく耳をすましてゐた。
- (7) 私は山鳩の聲もさびしいベルダンの戦跡に立つてゐます。
- (8) 船がえつさ／＼と陸の方へ漕ぎ歸つて來る。

(7) 私は山鳩の聲もさびしいベルダンの戦跡に立つてゐます。
 (8) 船がえつさくと陸の方へ漕ぎ歸つて来る。

附
録

〔第一表〕
五十音圖

ワ 行	ラ 行	ヤ 行	マ 行	ハ 行	ナ 行	タ 行	サ 行	カ 行	ア 行	
わ	ら	や	ま	は	な	た	さ	か	あ	ア 段
ゐ (ヰ)	り	い	み	ひ	に	ち	し	き	い	イ 段
う	る	ゆ	む	ふ	ぬ	つ	す	く	う	ウ 段
ゑ (ヱ)	れ	え	め	へ	ね	て	せ	け	え	エ 段
を (ヲ)	ろ	よ	も	ほ	の	と	そ	こ	お	オ 段
		バ 行	バ 行	ダ 行	ダ 行	ザ 行	ザ 行	カ 行		
		ば	ば	だ	だ	ざ	ざ	が		ア 段
		び	び	ぢ	ぢ	じ	じ			イ 段
		ぶ	ぶ	づ	づ	ず	ず			ウ 段
		べ	べ	で	で	せ	せ	げ		エ 段
		ぼ	ぼ	ど	ど	ぞ	ぞ	ご		オ 段



〔第二表〕

口語動詞活用表

段 一 下										段 一 上										段 四										種類 行名	例語	口語 語尾																																																		
ラ	マ	バ	ハ	ナ	ダ	ザ	サ	ガ	カ	ワ	ヤ	マ	バ	ハ	ナ	ダ	ザ	サ	ガ	カ	ラ	マ	バ	ハ	ナ	ダ	ザ	サ	ガ				カ																																																	
流	絶	染	比	教	連	撫	捨	交	寄	告	受	得	居	懲	悔	見	浴	干	似	恥	朽	案	過	起	語	沈	飛	洗	死	打	貸	注	行	る	む	ぶ	ふ	ぬ	つ	す	ぐ	く	居	懲	悔	見	浴	干	似	恥	朽	案	過	起	語	沈	飛	洗	死	打	貸	注	行	る	む	ぶ	ふ	ぬ	つ	す	ぐ	く	ラ	マ	バ	ハ	ナ	ダ	ザ	サ	ガ	カ
れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	ぜ	せ	げ	け	え	あ	り	い	み	び	ひ	に	ち	ち	じ	ぎ	き	ら	ま	ば	は	な	た	さ	が	か																																																	
れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	ぜ	せ	げ	け	え	あ	り	い	み	び	ひ	に	ち	ち	じ	ぎ	き	り	み	び	ひ	に	ち	し	ぎ	き																																																	
る	え	め	べ	へ	ね	で	て	ぜ	せ	げ	け	え	あ	り	い	み	び	ひ	に	ち	ち	じ	ぎ	き	る	む	ぶ	ふ	ぬ	つ	す	ぐ	く																																																	
る	え	め	べ	へ	ね	で	て	ぜ	せ	げ	け	え	あ	り	い	み	び	ひ	に	ち	ち	じ	ぎ	き	る	む	ぶ	ふ	ぬ	つ	す	ぐ	く																																																	
れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	ぜ	せ	げ	け	え	あ	り	い	み	び	ひ	に	ち	ち	じ	ぎ	き	れ	め	べ	へ	ね	で	ぜ	せ	げ	け																																																
れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	ぜ	せ	げ	け	え	あ	り	い	み	び	ひ	に	ち	ち	じ	ぎ	き	れ	め	べ	へ	ね	で	ぜ	せ	げ	け																																																

〔第四表〕

助動詞活用表

比況	定指	譲敬	望希	量推		了完び及去過	消打	役使	身受	種類		
				まい	よう							
や	だ	ます	た	たい	まい	よう	た	ぬ	ない	させる	られる	語
たら	だら	ませ	た	た			たら			させ	られ	未然
た	た	まし	た	たく			た	す	なく	させ	られ	連用
た	た	ます	た	たい	まい	よう	た	ぬ	ない	させる	られる	終止
た	た	ます	た	たい	まい	よう	た	ぬ	ない	させる	られる	連體
た	た	ませ	た	た			たら	れ	なけれ	させ	られ	假定
た	た	ませ	た	た			たら			させ	られ	命令

〔第二表〕
口語動詞活用表

種類	行名	段 四				段 一 上				段 一 下				カ	サ																		
		ラ	マ	バ	ハ	ナ	ダ	タ	ザ	サ	ガ	カ	ア			ラ	ヤ	マ	バ														
例語	行注	死	洗	飛	沈	起	過	案	朽	恥	似	干	浴	見	悔	懨	居	得	受	告	寄	交	捨	撫	連	教	比	染	絶	流	植		
未然	語	く	すぐ	つ	ぬ	き	ぎ	じ	ち	き	ぎ	き	ひ	ひ	み	び	い	え	け	げ	せ	ぜ	て	ね	へ	べ	め	え	れ	ゑ			
連用	語	く	すぐ	つ	ぬ	き	ぎ	じ	ち	き	ぎ	き	ひ	ひ	み	び	い	え	け	げ	せ	ぜ	て	ね	へ	べ	め	え	れ	ゑ			
終止	語	く	すぐ	つ	ぬ	き	ぎ	じ	ち	き	ぎ	き	ひ	ひ	み	び	い	え	け	げ	せ	ぜ	て	ね	へ	べ	め	え	れ	ゑ			
連體	語	く	すぐ	つ	ぬ	き	ぎ	じ	ち	き	ぎ	き	ひ	ひ	み	び	い	え	け	げ	せ	ぜ	て	ね	へ	べ	め	え	れ	ゑ			
假定	語	け	げ	せ	て	け	げ	せ	て	け	げ	せ	て	け	げ	せ	て	け	げ	せ	て	け	げ	せ	て	け	げ	せ	て	け	げ	せ	て
命令	語	け	げ	せ	て	け	げ	せ	て	け	げ	せ	て	け	げ	せ	て	け	げ	せ	て	け	げ	せ	て	け	げ	せ	て	け	げ	せ	て

〔第三表〕
形容詞活用表

種類	類	例語	未然	連用	終止	連體	假定	命令
(ク活用)	寒	寒い		く	い	い	けれ	
(シク活用)	涼	涼しい						

〔第四表〕
助動詞活用表

種類	語	未然	連用	終止	連體	假定	命令
受身	られる	られ	られ	られる	られる	られ	られ
使役	させる	させ	させ	させる	させる	させ	させ
打消	ぬ		す	ぬ	ぬ	ぬ	
完了及去過	た	たら	た	た	たら		
推量	まい			まい			
希望	たい	たが	たが	たい	たが	たが	
敬讓	ます	ませ	まし	ます	ます	ませ	
指示	だ	だら	だ	だ	なら		
定義	です	です	です	です			

形容動詞活用表

種類	類	未然	連用	終止	連體	假定	命令
第一種	寒	から(ウ)	かつ(タ)				
第二種	静か	だ(ラ)	だ(タ)	だ	な	なら(バ)	

可能・自發・謙の「れる」「られる」は受身の「れる」
「られる」と活用が同じである。但し命令形がない。

【第二表】

口語動詞活用表

上	段	四	種類
ダ カ ガ ザ カ カ	ラ マ バ ハ ナ タ サ ガ カ	語 沈 飛 洗 死 打 貸 注 行	口語
恥ぢる 朽ちる 案じる 過ぎる 起きる	る む ぶ ふ ぬ つ す ぐ く	語 沈 飛 洗 死 打 貸 注 行	口語
ち ち じ ぎ き	ら ま ば ば な た さ が か		未然
ち ち じ ぎ き	り み び ひ に ち し ぎ き		連用
ち ち じ ぎ き る る る る る	る む ぶ ふ ぬ つ す ぐ く		終止
ち ち じ ぎ き る る る る る	る む ぶ ふ ぬ つ す ぐ く		連體
ち れ れ れ れ れ	れ め べ へ ね て せ げ け		假定
ち れ れ れ れ れ	れ め べ へ ね て せ げ け		命令

【第四表】

助動詞活用表

完び及去過	消打	役使	身受	種類
た	ぬ ない	させる せる	られる れる	口語
たら		させ せ	られ れ	未然
	す なく	させ せ	られ れ	連用
た	ぬ (ん) ない	させる せる	られる れる	終止
た	ぬ (ん) ない	させる せる	られる れる	連體
たら	ね なけれ	させ せれ	られ れれ	假定
		させ せせ せせ せせ (るよ) (るよ) (るよ) (るよ)	られ れれ れれ れれ (るよ) (るよ) (るよ) (るよ)	命令

昭和十二年十一月二十六日印刷
昭和十三年五月三十一日修正印刷
昭和十三年五月三十一日修正發行

中等新國文法（初級用）
定價四十二錢

著作權所有



著者

竹野長次

發行者

東京市神田區錦町三ノ一四
信太壽之助

印刷者

東京市小石川區久堅町一〇八
君島潔

製本者

東京市本郷區東片町三四
水上作次郎

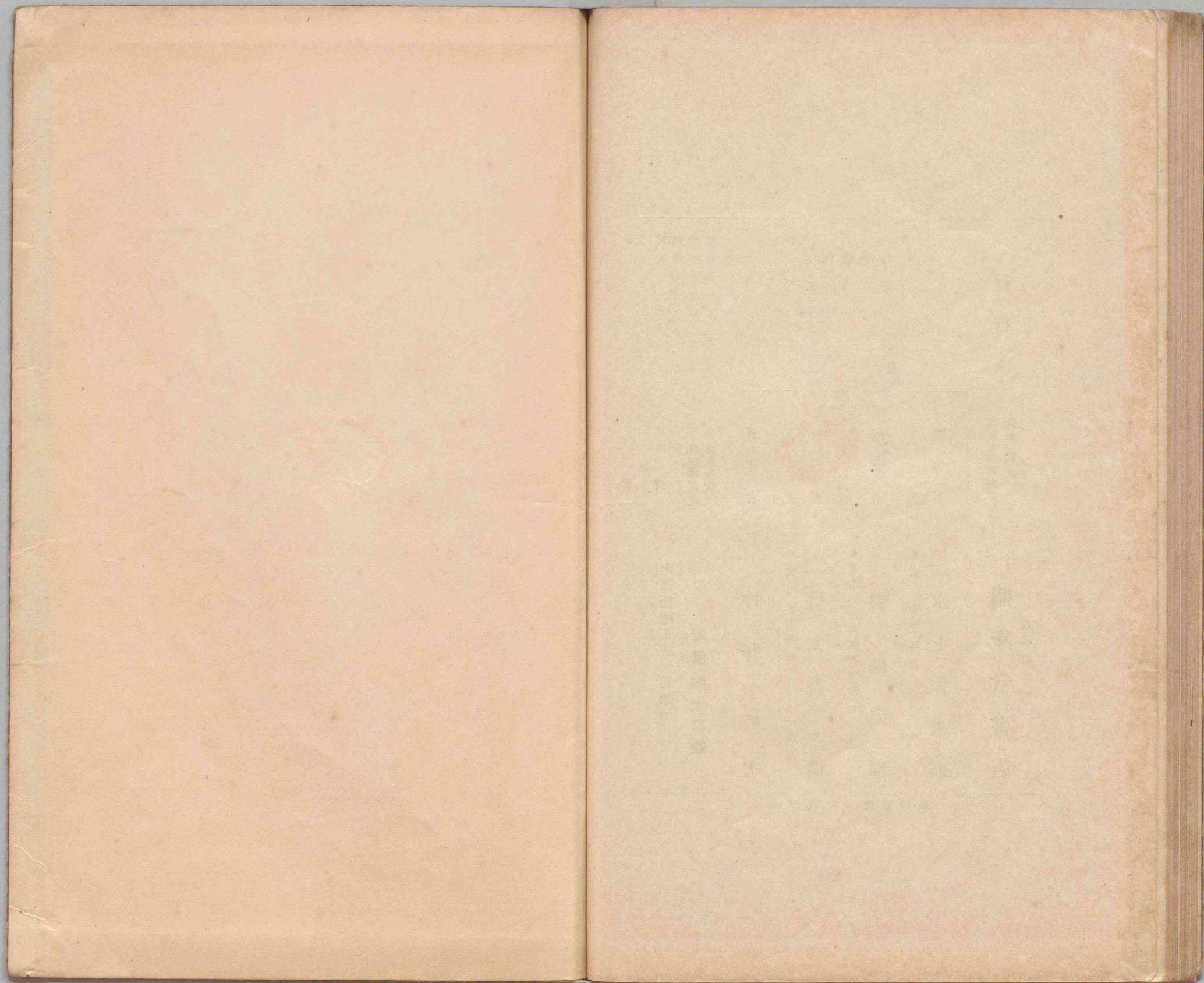
發行所

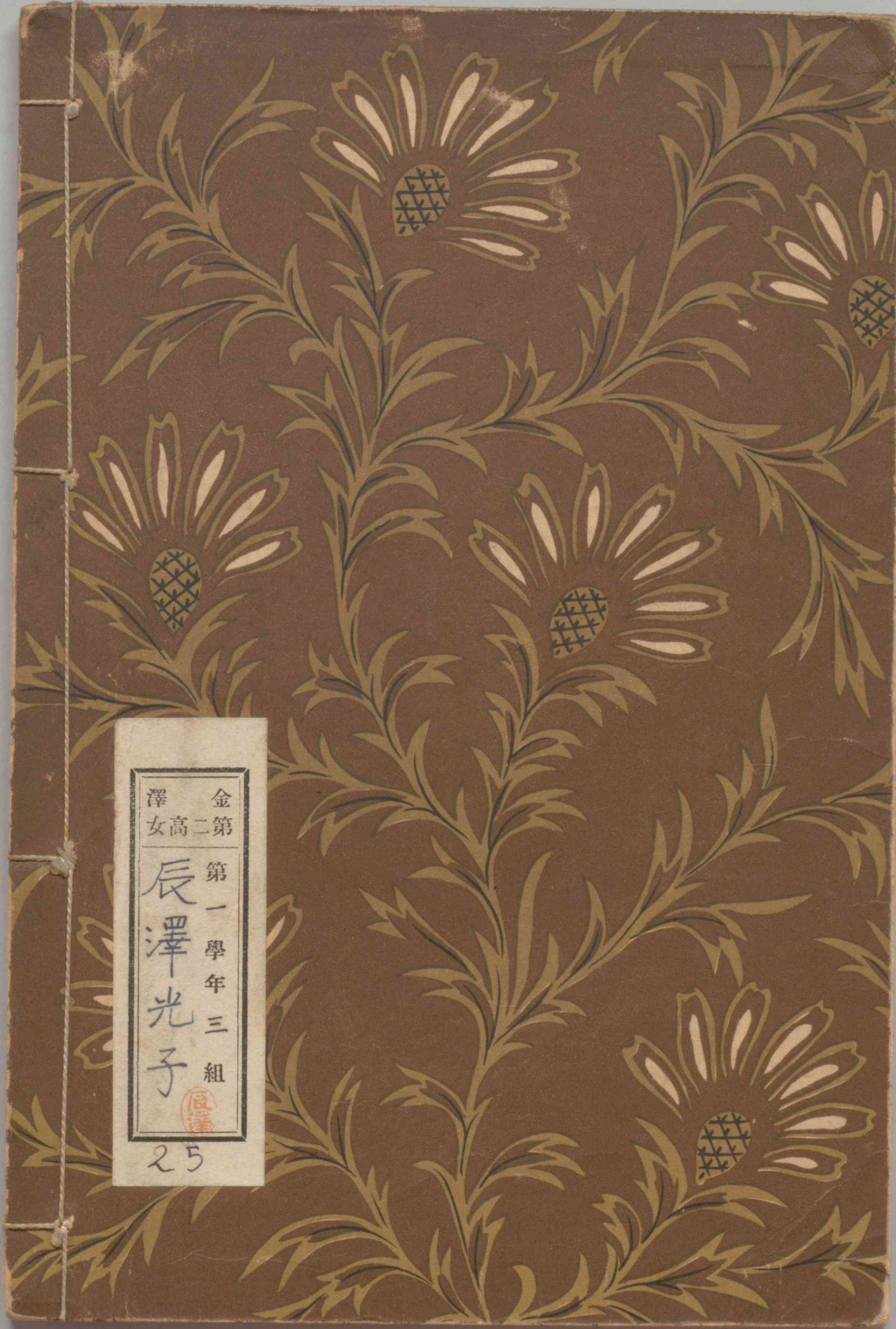
東京市神田區錦町三ノ一四
振替東京七五二九六

開隆堂書店

電話神田一八四九

共同印刷株式會社印刷





金第
二第
第一學年三組
澤女高
辰澤光子

25